

学校におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動の展開例

1 展開例作成の視点

本章では、前章の「展開モデル」に従い、それぞれの段階ごとに「活動内容」「児童・生徒の姿」「教師の支援」及び「留意点」を示して、小学校と中学校における展開例（学習活動計画）を提示する。展開例作成に当たっての工夫については、校種ごとに後述（小学校 15 頁、中学校 23 頁）したが、両校種に共通しては、以下の 3 点を考慮した。

第一は、教育課程上の位置付けについてである。展開例は、小学校、中学校ともに「総合的な学習の時間」を活用したものとなっている。学習指導要領『総則』には「ボランティア活動」という用語が 2 カ所記されているが、その一つが「総合的な学習の時間」においてである。ここでは、ボランティア活動などの体験的な学習を積極的に取り入れていくことが配慮事項として示されている。確かに「総合的な学習の時間」にボランティア活動等社会奉仕体験活動を実施しなければ、この時間のねらいが達成できないものではないが、前章までに確認してきたボランティア活動等社会奉仕体験活動の意義とその可能性を十分に引き出して行くためには、この時間におけるボランティア活動等社会奉仕体験活動の活用が、最も効果的と考えられる。

また「総合的な学習の時間」のねらいから考えても、ボランティア活動等社会奉仕体験活動は、有効な題材の一つではないだろうか。それゆえ、展開例では、教育課程上に明確に位置付いた活動として「総合的な学習の時間」を取り上げることとした。

第二は、授業時数等に関する事柄である。先進的な事例のいくつかは、1 年間の「総合的な学習の時間」のうち 70 時間近くをボランティア活動等社会奉仕体験活動に充てていた。しかし、多くの学校では、ここまでの時間を確保することは容易なことではない。それゆえ、小学校の展開例では、1 年から 6 年までの学校全体を見通した計画を構想した。また、中学校においては、活動で学んだ事を自分自身で生かし、人や社会の役に立つ活動をさらに継続していくことができる機会としての「発展」についても言及した。

第三は、児童・生徒の成長過程の考慮である。展開例では、『体験活動事例集 - 豊かな体験活動の推進のために -』（文部科学省初等中等教育局 H14.10）に示された児童・生徒の成長過程の特徴を参考に、活動内容を工夫した。

まず、小学校低学年時期では、児童が活動の場に親しみ、安心して活動ができるとともに、言葉や認識の広がりをもつことができるよう、お年寄りから昔遊びを教えてもらいながら一緒に楽しむ活動や、体験の気持ちを絵や手紙で表現することを勧めるなどの機会を設定した。

小学校中・高学年の時期は、体験活動と教科等での学習とのつながりを意識し、自分と対象（人や地域等）との関係を客観的にとらえることができるよう、4 年で国語教材を活用し、障害のある人とともに生活していることに気付くこと、5・6 年では、交流活動を繰り返し行うとともに、活動を振り返る機会を増やす工夫や教師、保護者等の働きかけの在り方を示した。

中学校時期の工夫としては、友達と共に心揺さぶられる体験をすることや、自分たちが考え取り組んだことの成果を社会に生かす時期として、テーマ学習を重視するとともに、探究活動を相互に振り返り、新たな課題を共有化していく活動を積極的に取り入れた。また、上述したように、学んだ事を生かしつつ、自分にできる事は何かを考え、実践できるよう援助し、継続して活動に取り組める情報提供や場づくりを重視した。

2 小学校における展開例

(1) 計画を立てるにあたって

小学校では児童の心の成長発達を視野に入れ、6年間を見通した学校全体で取り組む計画的・継続的な活動計画を構想することにした。

「人と地域と深くかかわる」という全体テーマの下、1年から4年までの活動を5・6年合同の活動における土台として位置付け、体験活動を積み重ねる。このことにより交流活動に必要な思いやりの心等の素地が作られ、5・6年での交流活動を重視した取り組みが可能となる。5・6年においては合同の活動を構想し「総合的な学習の時間」110時間のうち、学校としての取り組みやすさを考慮して、授業時数35時間扱いとした。

(2) 計画の工夫

オリエンテーション

5・6年合同の活動とし、前年度活動してきた6年生が体験に基づいた話をし、5年生の興味・関心を喚起する場とした。6年生にとっては、体験から得た思いや考えを多くの人に伝えられる場となり、5年生と「思い・考え」の共有化ができ、活動の素晴らしさを伝えていくことができる。異学年合同の取り組みは、オリエンテーションの場だけでなく、活動を通して児童相互の教え合い・高め合いも期待でき、昨年度経験した6年生が自信をもって主体的に活動を進めることができる。

グループ活動を円滑に進めるために

児童にとって地域の中でボランティア活動等社会奉仕体験活動をしていくこと自体が試行錯誤の連続であり、人と人との関係を学ぶ好機となる。体験活動そのものが、「グループワークトレーニング」であると言えるが、活動をより充実したものにするため、また安全性の面からも集団でのルールや話し合いの方法、役割分担など、グループ活動の基本を日常的に学ぶ機会を集団の実態に応じて随時設定するようにする。

自分にあった課題を見付けるために

児童が自らの活動に意欲的に取り組むには、児童が本当にやりたいと思える課題であることが大切である。そのために自らの課題をなかなか見付けられない児童のために、他のグループの活動を体験してもよいとする「お試しタイム」を取り入れた。「お試しタイム」には、課題を見付けるためだけではなく、活用した児童がその時に学んだことを自分の活動に生かしたり、友達に伝えたりできる良さがある。

効果的な支援のために

教師の働きかけとしては、直接的なアドバイスだけではなく、児童が考えるような言葉かけを心がけることが重要になる。

活動には保護者や地域の方、施設の方にも積極的にかかわってもらい、連携を密にしていくことを重視し、時間割等を工夫して活動終了後、感じたことを出し合う会をできるだけ早く設定したい。教師も気付かなかった、児童の新たな一面を知るチャンスであり、児童と一緒に育てていく感覚、自分も活動にかかわっているのだという自覚をもってもらうためにも良い機会となる。